

なか い てい じ
中井貞次

1932(昭和7)年京都市に生まれる。1954(昭和29)年京都市立美術大学工芸科卒業、専攻科に進んだ。大学では蠟染を小友友之助、型染を稲垣稔次郎に学び、藍を基調とした蠟染という独自技法による染色作品を一貫して制作している。西アジアから中東にかけて、またヨーロッパ全土に亘る2度の長期在外研修を経て、風土に根差した染色の在り方を模索した。そして風景から得たイメージを、抽象形態の構成とする作品により、日展の工芸界に確たる位置を築いてきた。2008(平成20)年に日本芸術院会員となる。2013(平成25)年に京都府文化賞特別功労賞受賞、2017(平成29)年に旭日中綬章受章。



新制大学としての京都市立美術大学の時代

京都市立芸術大学は、当初1880年に府の画学校として発足しています。その歴史はもう140年になりますね。私はその中の41年間京都市立芸大にいて、学生時代を入れると、50年近くになります。工芸科の染織を卒業し、専攻科を修了、すぐその続きに工芸科の図案専攻の助手として入りました。それから図案専攻、デザイン専攻、デザイン科の講師、助教授、教授という具合で、41年間いたわけです。1950年に今まであった美専(京都市立美術専門学校)が美大(京都市立美術大学)に昇格しました。その時の1回生として私は大学に入るわけです。戦後間もなく混乱期に入って、新しい美術学校を作るに至りますが、どういう形で新制大学にふさわしい美術学校にするか。あくまでも専門の美術学校とするのか、新制大学として教養を身に付ける学生を育てるのか。大いに議論があったわけです。結果的には、すべてを変えて新しい大学を作ろうということになりました。その新しい美術学校作りを率いたのは、長崎太郎という学長でした。山口高等学校の校長を務め、山口大学への昇格にあたった人です。この先生と京大の美学美術史の井島勉先生が二人で、新しい大学の先生を探されたわけですね。当時京都におられた本当に一級の、最高の先生方を各科選ばれたんです。日本画は榊原紫峰先生、徳岡神泉先生、小野竹喬先生、福田平八郎先生、上村松篁先生など、日展でも一番の軸になっていた素晴らしい先生方。洋画は須田国太郎先生、黒田重太郎先生、川端弥之助先生、高林和作先生、今井憲一先生、国盛義篤先生、津田周平先生など。当時の関西美術院の錚々たる先生方が入られる。工芸科のチーフとして呼ばれたのは、富本憲吉先生です。バーナード・リーチとも仕事をしている、見識ある富本さんをどうしてもチーフにしたいと、長崎学長が説得して。

上野伊三郎先生とフェリス・リッチ先生

当時すでに工芸科にあった陶磁、染織、漆、図案と四つの専攻を考慮し図案専攻の教員に誰を選ぶか。欧米のデザインを指導できる先生がなかなか見つからないなか、私の先輩が見つけたのが、上野伊三郎先生とフェリス・リッチ先生でした。こういった先生方を学生の手で大学に招じることができた。おそらく日本の他所の学校では考えられないことでした。聞き届けた長崎太郎先生と井島勉先生は偉い方だと思います。

伊三郎先生は京都、中京の宮大工の棟梁の息子で、早稲田大学の建築学科を出て、それからドイツ、オーストリアに留学して勉強され、ヨーゼフ・ホフマンの建築事務所に入れられるわけです。そこでホフマンの生粋のお弟子さんであるリッチ先生と出逢われた。後に伊三郎先生の奥様となる方です。リッチ先生はウィーン工場のスタッフとして婦人服地のプリントデザインを中心にされていました。私は京都市立芸大の図案専攻で伊三郎先生、リッチ先生の助手をしたんです。染織の専攻科を出た頃に、たまたま図案専攻の方で助手が辞めたから、ぜひ助手を頼むとなったわけです。

色彩構成、自然研究、材料実習

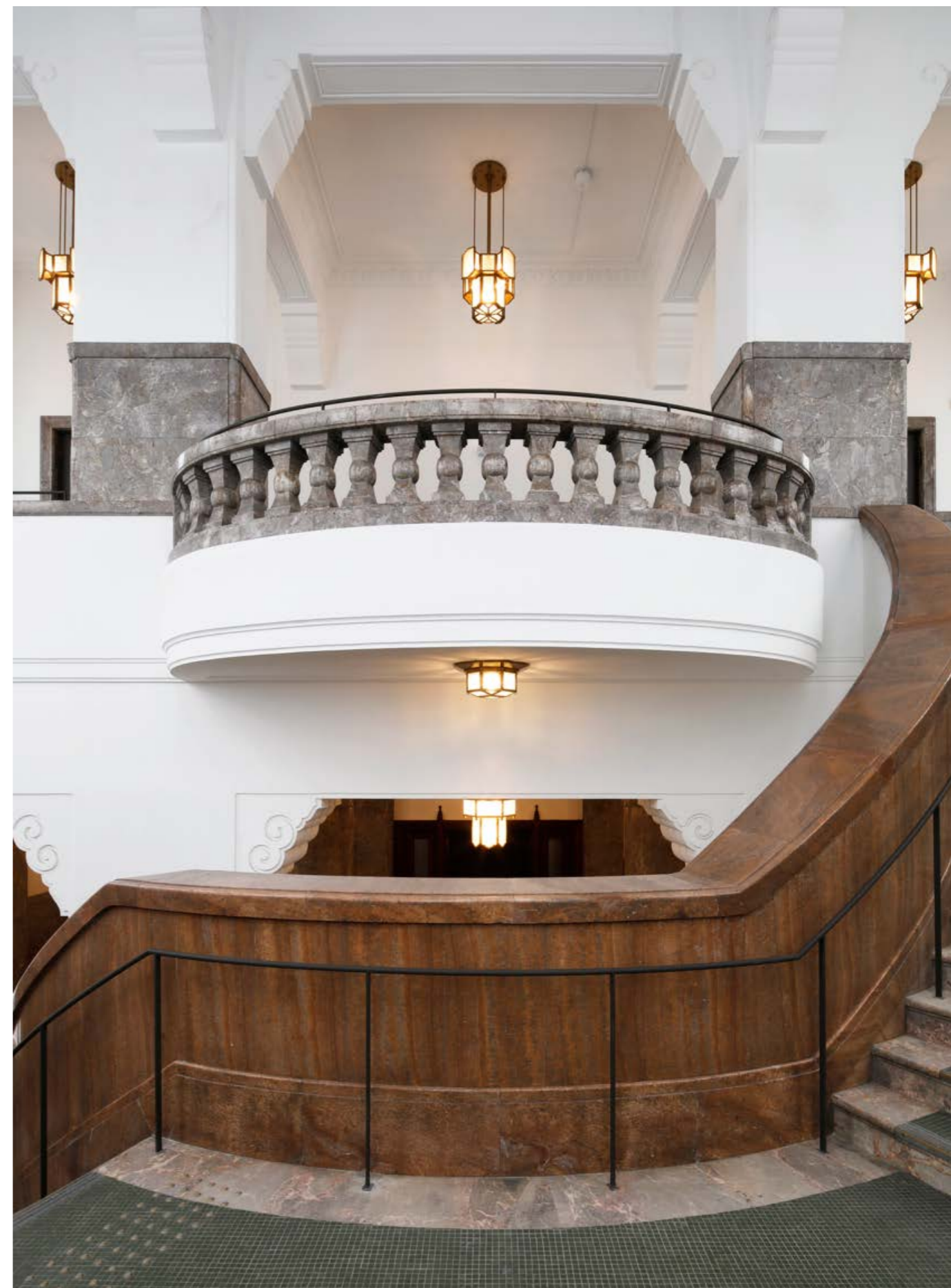
当時はどの学科でも1回生、2回生は、一通りの分野を学ぶんですよ。僕は染織を出ていますが、轆轤も引くし、漆も描くし、図案も行なった。一通り勉強して、3回生になって初めて染織、陶器、漆、図案の各専攻に分かれていく。私も最初の2年間は、リッチ先生の授業も受けています。リッチ先生が行っていた授業「色彩構成」は、ウィーンの工芸大学に伝わっている教育方法です。工芸やデザインの過程にとってもすごく大事な内容でした。とにかくファンタジーのある作品をと。「自然研究」の時間もありません。植物であれば、どこに茎があってどこからどういう具合に出て、どこに萼があって、花卉があって、種になって、と。植物や動物の構造を観察することが中心で、実際に対象を写実的に描くことはほとんどなかった。出所がしっかりつかめていないと絵は描けないからと、一つの物に対する自分のイメージを作ることが目的でした。もう一つ、「材料実習」がありました。金属には金属に見合った形がありますし、竹や木など、素材によって皆形は変わってくる。素材の性格を把握するために直接素材と向い合う材料実習をしそれを通じてデザインの原型ができてくる。そんなことで京都市立芸大のデザイン科はリッチ教授によってウィーン工場の教育方針が伝統となって受け継がれています(バウハウスではなく)。1950年代から60年代というのは、いろんな意味で日本のデザインが動いた時代ですね。工芸の方でも、今までの工芸の技術だけでなく、デザイン的な要素がしっかりとベースにないと、良いものはできないという考え方が出てきた時代だったと思います。

(聞き手：当館学芸課、ひろいのぶこ氏／構成：櫻井拓)

*新装版「作家にきく」は今後美術館公式サイトにも掲載予定です。

NEWS

京都市京セラ美術館ニュース



design: Kenta Shibano

本館 北広間
北円形階段
Photo. Koroda Takeru

今後の展覧会

- 京都市京セラ美術館開館1周年記念展「モダン建築の京都」2021.9.25-12.26
- 「コレクションルーム 秋期」2021.10.2-12.5
- 京都市京セラ美術館開館1周年記念展「コレクションとの対話：6つの部屋」2021.10.9-12.5
- ザ・トライアングル「加納俊輔：サンドウィッチの隙間」2021.10.26-2022.1.23
- 「コレクションルーム 冬期」2021.12.11-2022.3.13
- 「第8回日展京都」展 2021.12.18-2022.1.15
- ザ・トライアングル「川入綾」展 2022.2.8-5.15
- 京都市京セラ美術館開館1周年記念展「森村泰昌：ワタシの迷宮劇場」2022.3.12-6.5

近現代の京都がモダンである理由

10年前に関西にやってきた。東京の生まれ育ちで、親戚も関東にしかいない私が縁を持ったのは、2011年に大阪市立大学一来年度から大阪公立大学一が教員として採用してくれたからだが、来てみると、これが楽しい。異邦人ゆえに何かと目新しかったり、日本史に登場する土地や人物が近くに感じられたりといったこともあるけれど、専門にしている日本の近現代建築史の立場からして、とても興味深い。

のっけからざっくりと「関西」と表記した。こうとしか呼べないものが関西にはある。仮に畿内を選んで、京都、大阪、神戸と3つの都市名を挙げるだけでも、個性の違いは明らかだ。京都は伝統を、大阪は商人を、神戸は国際性を、各々の都市のキャッチフレーズにするだろう。違いは明快で、歴史に根ざしている。同時に、関連性もある。先の3都市にしても、距離的には遠くない。全国的に見れば、言葉やしきたりが似通っている。人や資本が通じ合いながら発展してきた。こうした各都市が並立した上での全体を呼ぶとすると「関西」という言葉になる。ここを単なる日本の一地方として捉えず、それぞれの都市だけに閉じず、もちろん日本全体と同一視しないことで、少し前の事柄から、私たちの現在を認識できる。建築は、その際の有用な入り口となるだろう。

「モダン建築の京都」展も、そんな風に近過去の建築を見つめ直し、未来の京都に対する思考を拡げられる展覧会である。展覧会の7つのセクションの最初は「古都の再生と近代」。それまで蓄えられてきた文化や技術は、いかに西洋の言葉に読み替えられていったのか。建築はその軌跡を物語る。続く「様式の精華」では京都の西洋建築の美しさに、「和と洋を紡ぐ」では大胆な和洋折衷に目を見張るだろう。伝統の厚さが、求められる質を高くしている。「ミッションリー・アーキテクトの夢」も京都ならではの、日本にとってキリスト教とは何であったのか。再考させるだけの名作がこの街にはつくられ、残されているのだ。日本最古の持続する都市は流行にも敏感で、「都市文化とモダン」はそうした側面を、「住まいとモダン・コミュニティ」は居住の面から、継承と変化を照らし出す。大阪とは違うなあと思わせるのは、特に最後のセクション「モダニズム建築の京都」である。ベタに「すぐに役立つ」や「今こうなっているのだから」を超えた学術的・理念的な伝統が宿る土地であることは、京都大学などから輩出された建築家による先鋭的な試みや、全国的な建築家の傑作からうかがえる。「今ここ」から離れた思考や試行は、近現代という時代が持つ可能性であって、そう考えてみると京都の建築が、役立つ模範が求められる公的な中心地よりもモダンなことも当

倉方俊輔 | 建築史家

然かもしれない。

京都市京セラ美術館で開催される事実が、さらに期待を高める。当地は近現代の京都の焦点の一つだ。日本にとって近現代とは何だったのか。展示を見た後に明治期に創出された平安神宮が再考させ、大正期の武田五一による京都府立図書館や、昭和期の横文彦による京都国立近代美術館も近接する。会場そのものが作品でもある。和風意匠の鉄筋コンクリート造建築をいかに扱い、昨年リニューアル・オープンされたのかを、2016年に再開館したロームシアター京都と共に見て考えることは、継承の時代における最良の学びになるだろう。

こちらに来て、2013年に大阪での「生きた建築ミュージアム事業」の立ち上げにお声がけいただいた。それは日本最大の建築公開イベント「イケフェス大阪」を生み、2019年にはのべ5万人が参加して、従来の文化財の枠を超えた、市民を中心とする実際理解の流れを大阪に根付かせる結果となった。今年も10月30日・31日を中心に、冊子の発行や動画公開、オンライントークなどを準備している。良質の建築がつくれ、残され、生きて使われている。民間の力を軸に、東京はまた違った角度から近現代の日本を浮き彫りにする街であることは、もっと自負されて良いだろう。

「モダン建築の京都」展も、同様の出来事の始まりになるのではないか。大阪らしさのクリシェが「イケフェス大阪」によって軽々と乗り越えられたように、大阪とは異なる京都らしい起点としての京都市京セラ美術館から、京都らしさはさらに幅広く捉えられていくに違いない。近くに目を向け、相互に交流して、関西という場所の意義を、より顕在化できたらと思う。

倉方俊輔(くらかた・しゅんすけ/建築史家)

1971年東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学大学院修了後、伊東忠太の研究で博士(工学)を取得。現在、大阪市立大学教授。著書に「京都近現代建築ものがたり」(平凡社新書)、「神戸・大阪・京都レトロ建築さんぽ」(エクスナレッジ)、『吉阪隆正とル・コルビュジエ』(王国社)、共著に「別冊太陽 日本の住宅100年」(平凡社)など。「モダン建築の京都」展アドバイザーの一人。



撮影：下村しのぶ

【展覧会情報】

京都市京セラ美術館開館1周年記念展「モダン建築の京都」
2021年9月25日(土)～12月26日(日) 会場：新館 東山キューブ



左より) 大礼記念京都美術館(現・京都市京セラ美術館) 撮影：来田猛/同志社クラーク記念館 画像提供：同志社大学/レストラン矢尾政(現・東華菜館) 撮影：京都市京セラ美術館 国立京都国際会館 画像提供：国立京都国際会館



高橋耕平
現代美術家

ひろいのぶこ
繊維造形作家

宮永愛子
現代美術家

青木淳
建築家・当館館長

中谷至宏
当館学芸員

中谷——「コレクションとの対話：6つの部屋」は、それぞれの展示室に当館のコレクションが展示され、アーティストがそれらと「対話」をしている展覧会です。部屋ごとに分かれてはいるものの、展覧会全体として様々な対話が生まれきたらいいと思い、企画しました。

青木——2020年に美術館がリニューアルオープンした際に、コレクションルームが設けられました。当館は1933年に大礼記念京都美術館として開館したときから、収蔵品を持ち、それらが常に鑑賞できる美術館を目指すと言っていました。とはいえ常設の展示場所はありませんでしたし、最初は収蔵庫もありませんでした。ようやく今回のリニューアルで、コレクションルームができたわけです。

常設展示を行なうだけでなく、収蔵している作品や資料と、今生きている我々人間が対話をする機会をつくることも大事だと思いました。その対話から気づきを得たり、考えたりする。この展覧会を通じて、多様なタイプの対話が生まれるといいなと思っています。

中谷——例えば高橋さんの映像作品は、展示室に入ると裏側から見えて、ぐるっと回ると表側が見えるようになっています。そのことが手前のひろいさんの展示室で、山鹿清華の下絵と完成した染織作品で表裏が反転していることと繋がって、作品の表裏の関係という視点が見えてきます。そういう思わぬ関連が、とても面白いなと思いました。

宮永——今回の展示で取り上げた私の曾祖父である陶芸家、初代宮永東山は、海外への視察を経て、京都に移り住んで1900年頃に焼き物を始めたのですが、当時は西洋に憧れてどんどん日本が変わっていく時代だったことが、コレクションからも感じられます。そんな想像ができるのは、美術館に数多くの作品や資料

が所蔵されているからです。

それらを紐解いていくと、わくわくすると同時に、励まされます。私自身が、今、その時代を受けて、これから何をしたいかを考える機会になりましたし、それが対話の一つのあり方だと思います。自分の視線で過去の作品の違う見せ方をするだけが対話ではなく、それぞれの作家がこれからどんな世界をつくっていくか、それが京都という場所へどんな作用をもたらすかに挑戦できる機会でもありました。

高橋——以前、この美術館が持つ版画のコレクションをベースにした映像作品を作ったのですが、何年に誰の作品が購入・寄贈されているのか、その資料を読むだけですごく面白かった。当時の学芸員や市の文化担当が誰か、財政状況など、複数の要因が影響しているのではないかと想像しながら、今回も取り組みました。収蔵作品のリストを見れば見るほど、より多くのことが発見できますし、まだまだ読み込めると思います。

ひろい——今回取り上げられている加藤一雄さんは私にとって、懐かしいお名前です。中学で習った美術の先生が加藤さんのことをよくお話しになっていました。展示されている『無名の南画家』という本を、貸して下さったりして。私自身がずっと前からこの美術館に、見えない糸で繋がっていたのだと感じました。

私自身が「対話」したのは山鹿清華という染織の巨匠ですが、時々本で見るぐらいの距離感の方だったのですが、ずっと引っかかっていました。それがこういう展覧会に結びつくのは、つくづく面白いなと思いますね。今までばらばらにあったものや、全然見えなかったことが繋がっていく。時間や空間を異にする人や物どうしてあっても、美術館の長い時間の流れの中に組み込まれていく。それが美術館の力であり伝統

「コレクションとの対話 6つの部屋」開幕記念座談会
コレクションとの共演、競演、饗宴
本展覧会の出展作家を迎え、それぞれの視点から本展について「対話」をしていただきました。作家各々の当館とそのコレクションとのかわりをはじめ、会場展示の最中で、互いの展示室のつながりを通して見えてきた思わぬ発見について語り合っていました。ぜひ、出展作家同士の「対話」を携えて、本展覧会へ足を運んでいただけましたら幸いです。

なのでしょけれど、その伝統は単独であるわけではなくて、代々の学芸員の方も含めて、みんなが何かの形で繋がっているということなのだと思います。それが面白い。

中谷——いつもコレクションルームで観ていた作品が、こういう形で対話ができるのかと感じていただける展覧会になればいいと思っていました。それと同時に、コレクションとそれぞれに全然違う形で向き合っていただけのアーティストが身近にいる、京都の奥深さも観ていただきたいです。

宮永——例えば展示室どうしの対話。ここここが繋がっているとか、どんな対話がなされているかを考えながら見てまわるのも、楽しいですね。

高橋——情報量が多い展覧会ですよ。あるテーマで1回読み解いても、また別のテーマでも読み解くことができる。レイヤーがいくつもあるので「あの作品はどんなものだったかな」と、展示室を戻ってみたい。

青木——気が付けば気が付くほど面白いことがたくさん、この展覧会の中にはあります。全体を一周すると入り口に戻ってくるようになっていて、何回もぐるぐるまわるなかで、様々な繋がりが張り巡らされていく。このことがすごく重要だと思いますし、そんなふうに「コレクションとの対話展」を、楽しんでいただけたらと思います。

【展覧会情報】

京都市京セラ美術館開館1周年記念展
「コレクションとの対話：6つの部屋」
2021年10月9日(土)～12月5日(日)
会場：本館 北回廊1階